

ホルスタイン未經産牛における受胎月齢がその後与える影響の調査

十勝管内家畜人工授精師協会青年部

1. はじめに

現在ホルスタイン未經産牛に授精を開始するのは生後14ヶ月齢前後が多くなっているが、現場では生産者から時折12ヶ月齢未満でも授精の依頼をされることがある。

しかし、あまり極端な若齢での受胎は分娩事故等が懸念されるため、技術者は若齢での授精を避けるため生産者を説得しつつも実際には多く授精されてしまっている現状にある。

2. 調査の目的

実際にどれくらいの月齢で授精されているのか、またその後分娩の際にどんな影響があるのかなど、様々な分野で調査し具体的に数字に出す事で生産者にリスクの説明をする上での材料にする事、また調査を行っていく上で従来のイメージと違った別の傾向が見えてくるのではないかと考え、本調査を行った。

3. 材 料

- 材料 十勝管内6農協で飼養されているホルスタイン未經産牛に対する授精データ及び乳検データ
- 期間 平成23年度～平成28年度

4. 方 法

- 授精月齢ごとに90日NRでの受胎率を初回授精（以下N）、再発（以下R）ごとに算出
- 受胎した月齢ごとに分娩時の死産率を算出
- 死産だった個体の難産等分娩状況の詳細を調査
- 受胎月齢別に平均空胎日数や乳量を調査

5. 調査結果

○受胎率

授精月齢ごとの受胎率は12ヶ月齢未満では受胎率は低下傾向にあり、N受胎率は授精月齢が長くなるにつれて上昇傾向、R受胎率は授精月齢が長くなるにつれて受胎率は低下傾向にある。授精頭数についてはやはり14ヶ月齢前後が多くなっている。そして当初の予想よりも12ヶ月齢未満の授精頭数が多くなっている結果となった（図1）。

○死産率

受胎月齢ごとの死産率を見ていくと、14ヶ月齢以前の死産率が上昇傾向にあり、特に11か月齢が25%と高い数値となった（図2）。

○死産分娩状況内訳

上記死産だった個体の分娩時における難産等の発生状況を調査した結果、受胎月齢ごとの難産発生率は大きな差は見られない。しかし、11ヶ月齢受胎分に特に注目すると、難産の発生率は他の受胎月齢と大きな差が無いにも関わらず死産発生率が高い傾向が見られた。